かけこう

掛合分校
後援会
事務局
（0854）
62−0084

掛け算、足し算、米作り

校長　岡　秀樹

この春、三刀屋高等学校掛合分校の校長として着任いたしました。後援会の皆さまには平素より本校の教育活動にご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、「掛合」という地名について、私は以前こんなことを考えたことがあります。「『掛』は掛け算、『合』は加えるのだから足し算ということになる。掛けて、足して、どんどん増えていくという意味になるんだ。えらく縁起のよい名前だなぁ」と。そして、いったいどんな由来でこのような地名ができたのだろうかと「掛合町史（昭和五十九年 発行）」を調べていると、次のような記述を見つけました。

「新しい村作りのなかで、村の記章が制定された。村章の（×）は、乗にして村名の『掛』に通じ、（＋）は加にして『合』を意味し、合せて掛合の村名を表わすとされ、加・乗ともに物の増加を意味し、掛合村の将来、いよいよ積極的発展を期するものとされた」

図5・7　掛合村の村章

「掛合町史」より

図書館で町史をめくりながらこの記述に出会ったとき、掛合村の立ち上げに関わられた先人の方々と時を超えて自分の思いがつながったような気がして、なんだかとても嬉しく思いました（手前勝手な考えで恐縮ですが…）。

大正二年（一九一三年）に制定されたこの掛合村章は、昭和三〇年（一九五五年）に誕生した掛合町へと引き継がれ、雲南市がスタートする平成十六年（二〇〇四年）まで、一世紀近くにわたって町のシンボルとして親しまれていくことになります。

同時にこの「×」と「＋」は「掛合高校章」にも反映され、つい数年前まで講堂の緞帳で存在感を示していたことをご記憶の方も多いと思います。

講堂の緞帳にあった「掛合高校章」

現在、深い意味の込められたこの素敵な記章はもうなくなってしまったのか…いや、それはもったいない…ということで、かなり強引なこじつけではありますが、私の考えたことをご披露します。掛合高校章をしばらく眺めていると、なんとなく「米」の字に見えてきたのです。

「米」の字は穀物の穂と実の象形であり、「×」と「＋」を合わせたものではありません。要するに、漢字の成り立ちとしては全く異なるものであり、国語教員の私がこんな「珍説」を唱えるのはよくないことも分かっております。ただ「掛合」という地名は現在も変わることなく続いており、この文字には将来の発展を期するというマインドが入っているということも何ら変わりがありません。そこで、記章に込められた思いと、現在のカケコーの活動がつながるのではないか、という少々強引な着想が湧いてきたのです。

ご存じの通り、我がカケコーは宇山営農組合の皆さまの多大なご協力をいただきながら、営農体験実習を行っております。米作りに携わっておられる農家の方々から見れば、田植えや稲刈りというのはごくピンポイントの関わりでしかないことは承知していますが、農業の専門高校でないカケコーの生徒が田植え・稲刈りに加えて海外（台湾）での販売まで行うというのは、普通科課程の高校としては異例ともいえる深い関わりといってよいと思います。

このところの社会情勢の変化によって、かつてないほどコメについての関心度は高まってきています。そうした中で、コメを取り巻く諸問題を「自分ごと」として考える機会がふんだんに用意されているカケコーの生徒は、学校のキャッチフレーズである「ホンモノの探究」をまさに実践していると言ってもよいのではないかと考えています。

「掛合」の文字に込められた「×」「＋」の意味を感じ取り、先人の心意気に思いをはせながら、生徒・教職員が一丸となってカケコーを盛り上げていきたいと思っています。

後援会の皆さまには、今後とも本校の更なる挑戦を支えていただきますよう、よろしくお願いいたします。

令和六年度末　教職員異動のお知らせ

春の人事異動により、四名の教職員をお送りしました。在任中は、掛合高校の発展のためにご尽力いただき、ありがとうございました。新しく赴任された方々には、これからお世話になります。

○転任者

校長	本間　達也
国語	鐘築　晶子
地歴・公民	岡　一宏
理科（生物）	大門　透

○新任者

校長	岡　秀樹
国語	藤原　智子
地歴・公民	松本　学
理科（生物）	福代　彩乃
芸術（美術）	水津　友宏
学校アシスタント	落合　宏
警備員	明山　治
舎監（6月より）	景山　明美
舎監（7月より）	岡田　祐子
炊事員	和田　弘子

『本物』になるために『本気』を出そう　～入学式～

四月十日（木）、入学式を行いました。朝から雨模様との予報が心配されましたが、きれいに晴れ渡り、暖かく、穏やかな春の日差しが降り注ぎ、式後の記念撮影まで無事に終えることができました。そのようななか、在校生や来賓の方々、保護者、教職員に見守られて、新入生三十一名が入学しました。

岡校長から新入生へ向けて、まず「入学おめでとう」とともに「ありがとう」と声を掛けました。「たくさんの高校の選択肢の中からカケコーを選んでくれなければ今日の出会いはありませんでした。今年で七十二周年を迎える歴史と伝統のあるこの掛合分校、親しみを込めて『カケコー』の生徒としてこれから三年間、自分をたくましく成長させるための学びを深めていってほしい。」とメッセージを送りました。

また、カケコーの教育理念に掲げる「掛高には『本物』がある」の「本物」になるためには、様々な教育活動に生徒皆さんの「本気（主体性）」が加わることが必要であると、現在俳優として活躍中の卒業生 曽田昇吾さん を例に説明しました。

最後には、新しい環境に期待と不安を抱く入学生たちに、「カケコーの小さなサイズ感は却って地域に支えられ、地域とともにある学校であると安心感を抱かせてくれる。三年後には自立した大人として卒業してほしい。」と結びました。

入学式のあとは、玄関前で保護者・教職員全員を交えた記念撮影を行ったのち、前日に在校生・教職員が心を込めて準備した教室で初めてのホームルームを迎えました。

真新しいブレザーに身を包み、凛とした緊張のなかにも初々しさが感じられる一日となりました。

先輩たちの取組と思いを引継いで　～一年生地域探究学習のスタート～

四月二十五日（金）四限の総合的な探究の時間に、一年生から一年生へ「地域探究学習」の引継ぎがありました。

二年生は昨年度一年間かけて、掛合町内五地区に分かれて、毎週の総合的な探究の時間や週末、夏・冬休みに行われた各地区でのイベント等に参加し、地域の方々と直接かかわりながら地域が抱える課題等に向き合い、高校生目線で解決策を考えてきました。

この日はその成果と課題について総括し、一年生へ引き継ぎたいことを伝えました。これを受けて、一年生は今年度の自分たちの探究活動を始めていきます。先輩たちの取組と思いは一年生へと引き継がれることになります。

うやま米はうまい！　～二年生営農体験実習（田植え）～

五月九日（金）に二年生が「営農体験実習（田植え）」のため、吉田町民谷宇山地区へ出かけました。当日朝は小雨が降り、田植えができるか心配されましたが、午前中の小止みのタイミングで無事に実習を終えることができました。また、午後にはお世話になる宇山営農組合・雲南市から講義を受けたり、生徒たちからインタビューを行ったりしました。

現地到着後さっそく農具「ばばひき」を使ったライン挽きを教えてもらい、その線の上に、全員で苗を植えていきました。この二年生は昨年五月の入間花田植えに参加したこともあり、皆が一度は田植えを経験しています。寒空の下、風も田んぼの水も冷たいなか寒さに震えながらも、時おり空からは柔らかな明るさがのぞき、生徒たちの賑やかな声が広がりました。わずか一時間ほどの田植えでしたが、農家の方々の大変さを実感できました。

「楽しくて時間があっという間だった」「またやってみたい」とみんなで協力して田植えができたことに達成感を抱く生徒も多かったです。

昼食は準備していただいたうやま米のご飯の入ったお弁当をいただきました。一口目からお米の甘さを感じることができ、「冷めても美味しいうやま米」のおいしさを味わいながらその魅力が体感できました。

食後は、まず宇山営農組合の方々から、組合の現状や課題、お米ができるまでの流れ、なぜ米を輸出するのか、なぜ台湾なのか（二年生は十一月に台湾研修旅行を実施する予定です）、そして台湾でのコメの販売の様子等の説明を受け、宇山地区を空撮した見事な田園風景を映した動画を見ました。そして、雲南市職員の方から雲南市と台湾の交流について、米輸出から人の交流へと題して、現地の物価やレートも交えた具体的な説明がありました。その後、二班に分かれて、営農組合のお二人へインタビューをしました。米作りのやりがい・楽しさや苦労、宇山地区のお米のおいしさなど、次々に質問しました。

今後も、宇山営農組合の皆様や関係方面の方々と協働しながら「たたら焔米（ほむらまい）、雪姫舞、うやま米」の販売戦略、広報などを行っていき、秋には稲刈り、台湾研修での販売も体験します。

雨降って地固まる ～三年生入間花田植え参加～

五月二十五日（日）に三年生が入間花田植えに参加しました。当日はあいにくの雨となり、残念ながら入間体育館で行われました。入間花田植えは県内外からたくさんの観覧者が訪れる有名な伝統行事です。例年すがすがしい青空の下で開催されてきましたが、今年は初めての屋内開催となったそうです。

感染症のため数年間中止されましたが、令和四年度に復活し、五年度は分校生徒の有志十一名が参加しました。昨年度は入間地区から以前の規模で開催したいとの要請を受け、学校をあげて一・三年生全員が参加しました。

参加者全員が体育館に集合して、まず神事が執り行われ、次に「はやしこ行列」が体育館中央で輪になって踊り歩き、伝統衣装を身につけ早乙女（さおとめ）となった女子生徒が体育館の端から端へと田植えを、法被（はっぴ）を着た男子生徒が苗渡しをしました。実際の水田ではなかったため思うようには田植えができませんでしたが、総勢四十名ほどの早乙女さんが一列になって、賑やかに行われました。

国際社会や海外への関心をさらに高めて ～三年生と島根大学留学生との地域交流～

六月六日（金）五・六限に雲南市民谷交流センター「夢民谷楽校（ムーミンダニガッコウ）」にて、三年生が島根大学の外国人留学生十八名と日本人学生二名との地域交流事業に参加しました。

二〇〇五年に雲南市と包括連携協定を締結した島根大学は市との関係強化に努めておられます。今回は「しまねの里山と世界をつなぐ実践活動二〇二五 in 雲南―中山間地域の『農』を通じた交流と『農』の魅力発見―」事業として、「島根大学の外国人留学生に市の産業等に触れてもらい、更にそこに暮らす人々との交流を通して日本の里山・農業に国際的な関係人口を育てる」ことを目的に、一泊二日のスケジュールで雲南市内を巡られました。

掛合分校には、三年生が昨年度台湾研修旅行を経験したことから声がけしていただきました。外国人留学生との交流により、海外への関心をさらに高めるきっかけ作りとなることも期待されました。

留学生は、中国・韓国・スリランカ・ブラジル・インドネシア・インド・ネパール・タイなどから来日され、年齢や学部、日本語の習熟状況も様々でしたが、生徒たちは身振り手振りを交えながら積極的にコミュニケーションを図ろうとしていました。

参加者たちは初めに、昨年度の営農体験実習でお世話になった宇山営農組合の須山さんから指導していただき、クロモジ茶づくり・ハーブティーづくりを体験しました。その後、台湾研修で現地の真理大学の学生たちに紹介したスライドを使って、掛合町の魅力や一年時探究学習の取組等を留学生たちに伝えました。

わずか二時間ほどの交流でしたが、生徒たちは往復のバス移動の車中や現地での記念撮影を通して、国際社会や海外への関心をさらに高められたようです。

2025 体育祭 Fun for Run ～笑顔と絆が紡ぐ、青春の物語～

七月十日（木）三刀屋文化体育館アスパルで体育祭を行いました。

以前は分校グラウンドや掛合体育館を利用してきましたが、天候を気にせずに、熱中症対策にも十分なアスパルは安心して実施できる環境として体育祭会場にはたいへん最適で、今年度で三年目を数えます。その様子がよく分かっている三年生を中心に、五月半ばから当日まで準備や内容などにいろいろと工夫を凝らしながら検討してきました。前日の現地リハーサルではJR木次線が運転を取り止めるほどの大雨が降り心配されましたが、当日は予定どおり開催することができました。

開会式後にはPTAより会長様の激励の言葉と差し入れをいただき、競技開始となりました。最初の種目「鬼ごっこ」は、男女・学年が入り混じった十名の逃げ役が背中に貼り付けた鉢巻きを鬼役三名に取られまいと、競技時間三分間にバレーボールコート内を縦横無尽に逃げ回る競技です。ウォーミングアップを兼ねて初めて実施しましたが、のっけから白熱したものとなりました。昼直前には応援合戦があり、赤組、青組がそれぞれにここまで準備してきたダンス、デコレーション、衣装などでしっかりとアピールすることができました。どちらの組も三年生を中心によくまとまっており、体育祭サブテーマ〝笑顔と絆が紡ぐ、青春の物語〟のとおり、応援合戦が展開されました。

午前の部が終わった時点で競技得点は僅差、午後の部開始の「綱引き」にますます白熱した闘いが繰り広げられ、最後の「選抜リレー」は、走者はもちろん、見ている全員が感動と興奮の渦に巻き込まれる、まさに体育祭テーマ「Fun for Run」（走るって楽しいんだ！）にふさわしい闘いでした。

競技、応援、衣装、デコレーションにはいずれも勝ち負けが決まりましたが、いずれの組も持てる力を精一杯発揮していた姿が、何よりも素晴らしかったです。

この体育祭は純粋にRun（走る）だけでなく、仲間との協力や支え合いが必要な競技や大きな声援、拍手もあって、協働することの大切さを学ぶ機会でもありました。今日一日を通じて、一人ひとりが見せてくれた全力の走りやチームワークに、深く感動しました。

朝早くからたくさんの保護者の皆様にご来場いただき、ありがとうございました。

戦後八十年 今こそ「平和を」 ～「折り鶴×シン・アート」ワークショップ～

七月十五日（火）一・二限に二年生・一年生のホームルーム活動として、それぞれワークショップを行いました。その内容は、「シン（芯）・アートの花を作成する」「折り鶴とつなげて吊るし飾りを作る」というものです。雲南市では毎年「永井隆平和賞」関連の事業が行われますが、戦後八十年の節目となる今年はより多くの方々に関わっていただきたいと市から要請を受け、当日を迎えました。

雲南市三刀屋町は、放射線医学の研究と原子爆弾により白血病に侵されながらも、『長崎の鐘』や『この子を残して』などの名作を著し、「平和を」の願いを全世界へ訴え続けた永井隆博士のふるさとです。三刀屋町では永井博士の業績を顕彰するとともに、博士の愛と平和の精神を、次代を担う若い世代へ伝えていくために、平成三年に「永井隆平和賞」を創設し、広く作文や小論文を募集してきましたが、合併した雲南市でもこれを引き継いでいます。

校内では、当日までにボランティア委員会から全校生徒へ呼びかけ、有志で折り鶴を作ったり、キッチンペーパーやトイレットペーパーなどの紙の芯を回収したりしてきました。当日は市教育委員会社会教育課の山根さん、株式会社CNCの多々納さんを講師にお迎えし、それら材料を使って吊るし飾りを作りました。まず、紙芯を加工した花びらを十枚接着して花作り、次に、折り鶴十羽とその花五個を一本の糸でつないで吊るし飾りが完成、という流れです。

花びらにはあらかじめ様々な染色が施してあり、その中から生徒たちは思い思いのデザインで花や吊るし飾りを作りました。完成品にはそれぞれの個性が描かれていました。今日の活動で、永井隆博士が訴え続けて来られた「平和を」の思いを改めてかみしめ、これからも伝えていくことが大切だと感じることができました。

◆事務局より

五月一日（木）全校朝礼を行い、七十二回目の開校記念日を祝いました。

一九五三（昭和二十八）年四月一日に掛合分校は定時制課程農業科及び家庭科の学校として設立され、五月一日には旧掛合小学校の一部を借りて開校式及び入学式を行いました。その五月一日が掛合分校の開校記念日です。一九五七（昭和三十二）年一月二十五日には新校舎が完成し、二月十五日には新校舎へ移転、その記念にメタセコイアが植えられました。

冒頭、岡校長はそのシンボルツリーにふれ、テレビ放送が始まり、エベレスト初登頂があったその当時の社会状況について話しました。「『山間地域の開拓にあたる青年を養成したい』という地元の強い要望を受け設立された掛合分校は、現在グランドデザインに『地域や社会に貢献する人材を育成する』ことを掲げています。表現は異なりますが、設立当時の思いを受け継いでいまがあるのです」と諭しました。

その後、二年前の二〇二三（令和五）年十一月十一日に行った創立七十周年記念式典直後に、当時の三年生たちが「カケコーの歴史七十年 ～閉校の危機を乗り越えて～」と題して発表した成果を紹介しました。それは、学校設定科目「地域創造」の授業で調べたカケコー七十年の歴史と古い映像や写真をまとめたもので、現在の自分たちの学校生活と比較するなどして、当時を振り返るものでした。

在校生たちは、自分たちの学校の歴史や伝統を知り、「カケコー」のよさや存在意義をきっと感じ取ったことでしょう。

【編集後記】

平素より、後援会の皆様、地域の皆様には掛合高校の教育活動に、格別のご理解とご尽力をいただき、また会費の納入等にもご協力いただき誠にありがとうございます。

生徒の学習活動や施設・設備の充実に役立てて参ります。今後とも変わらぬご支援、ご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。